アイルランド文学はどこからきたか

英雄・聖者・学僧の時代

三橋敦子著

三橋敦子（みつはし・あつこ）
1912年東京都生れ。東京雙葉高等女学校卒業後，聖心女子学院外国人部，日本大学英文学科卒。同大学院にて，英米文学，なかでも古代英語・中世英語を中心に研究。ダブリンのゲーリック・リーグ特別講座にてゲール語を研修。日本大学講師。1970年，日本アイルランド文学会を創立，同会代表。
主要編著書：「ゲール語四週間」「ゲール語基礎1500語」（以上，大学書林），訳詩集「秘義」（共訳，英潮社），他。

アイルランド文学はどこからきたか
——英雄・聖者・学僧の時代——　NDC 993

1985年10月31日　発　行

定価 2600 円

著　者　三橋敦子
発行者　小川茂男
発行所　誠文堂新光社
東京都千代田区神田錦町1丁目5-5
〒101　振替東京 7-6294
印　刷　星野精版印刷㈱
㈱大熊整美堂
製　本　藤沢製本㈱

検印省略　万一落丁乱丁の場合はお取り替えします

© 1985 Atsuko Mitsuhashi　Printed in Japan

ISBN4-416-88521-0

誠文堂新光社の雑誌　子供の科学／天文ガイド／MJ無線と実験／初歩のラジオ／DEVICE file／農耕と園芸／ガーデンライフ／フローリスト／商店界／アイデア／プレーン／ポートフォリオ／月刊　芽／愛犬の友／囲碁

246089

日文 701515518

アイルランド文学はどこからきたか

英雄・聖者・学僧の時代

二橋敦子著

誠文堂新光社

外国语学院图书馆

AMBASÁID NA hÉIREANN

12 Meán Fóir 1985

Scéal eipiciúil na saíochta de dhá mhíle bliain ó thuaisceart na hEorpa a bhí inchurtha leis an nGréig is leis an Róimh ó thaobh saibhris, ó thaobh éagsúlachta, is ó thaobh cumhachta, is ea stair na gCeilteach. I ndeireadh na dála ba léir tionchar na gCeilteach ón Meán-Oirthear go dtí an tAtlantach. Cultúr agus miteaseolaíocht uathúla a thug siad leo, maille leis an stíl ealaíne is éachtaí lastuaidh de na hAlpa tar éis tréimhse na hOighearaoise, meastar.

Furor celticus a thug na Rómhánaigh orthu agus i mbláth a n-impireachta bhí an Cheiltis ceann de chúig chraobh na hInd-Eorpaise á labhairt in Ankara, in Koln, i mBealgrád agus i Milano. Labhraíonn breis is dhá mhilliún daoine na teangacha Ceilteacha inniú sa Bhriotáin, in Éirinn, in Albain agus sa Bhreatain Bheag ach is í Éire an taon Stát náisiúnta Ceilteach a mhaireann beo. Is í an Ghaeilge ó chraobh Goidelach na Ceiltise a príomtheanga oifigiúil.

Is cúnamh an-mhór do thuiscint na Seapánach ar ár n-oidhreacht chultúrtha is ar scéal suntasach ár sinsear ó thuaisceart na hEorpa an foilseachán nua seo ó Chumann Litríocht Ghaeilge na Seapáine. Déanaim comhghairdeas croíúil leis an gCumann trína Uachtarán, an tOllamh, Atsúcó Mitsúhasí, ar a éacht iontach.

Seán G. Ó Rónáin

Seán G. Ó Rónáin

Ambasadóir na hÉireann

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

PREFACE

EMBASSY OF IRELAND

12 September 1985

The history of the Celts is the 2000-year epic story of the North European civilisation that rivalled Greece and Rome for richness, diversity and power. The Celts eventually made their influence felt from the Middle East to the Atlantic bringing with them a unique culture and mythology and a style of art considered to be the greatest achievement north of the Alps after the Ice Age.

The Romans called them furor celticus and at the height of their empire Ankara, Koln, Belgrade and Milan all spoke Celtic, one of the five branches of Indo-European. Celtic languages are spoken by more than two million people in Brittany, Ireland, Scotland and Wales today but Ireland is the only surviving Celtic nation State. Its first official language is Irish of the Goidelic group of Celtic.

This further publication of the Irish Literature Society of Japan is a major contribution to Japanese understanding of the remarkable story of our North European ancestors and our cultural heritage. I heartily congratulate the Society through its President, Professor Atsuko Mitsuhashi, on its splendid achievement.

Seán G. Ronan

Ambassador of Ireland

序

アイルランド大使館

1985年9月12日

ケルト民族の歴史は，北部ヨーロッパ文化において，ギリシャやローマと豊かさ，多様性，権力で競うほどの，2000年にわたる叙事詩的物語なのであります。ケルト人は，氷河期の後，アルプス山脈の北部で，最大の偉業を達成したと考えられている独得な文化，神話，また芸術の形態をもたらして，中東から大西洋に至るまでの地域で影響が見られるに至っております。

ローマ人は，帝国の最盛期に，アンカラ，ケルン，ベルグラード，ミラノなどでケルト語が話されていたところから，ケルト人を「フロル　ケルティクス」と呼んでいました。このケルト語は，インド・ヨーロッパ語の五派の内の一つであったのであります。ケルト語はブリテン島，アイルランド，スコットランド，そしてウェールスで200万人以上の人びとによって使用されていますが，アイルランドは今まで存続してきた唯一のケルト民族の国家であります。我国の第一公用語は，ケルト語のうちでもゴイデリック語族に属するゲール語であります。

日本アイルランド文学会による以前のものより進んだこの出版は，我々の北部ヨーロッパの祖先たち，ならびにその文化遺産についての注目すべき物語が日本における理解への非常に大きな貢献となるのであります。学会代表の三橋先生を通して，このすばらしい業績に対して祝辞を述べるしだいであります。

シオーン・ジー・オー・ロノーン
アイルランド大使

まえがき

1932年，晩秋の校庭に枯葉が低く土の面を舞っていた頃，私にとっては，もうじき誕生日（12月24日）がきて20歳（はたち）になる，「はたち…はたち…」ふと心に楽しくそっと繰り返していたそんなある日，授業の時，クラス担任であったアイルランド人のシスターから，1916年ダブリンで蜂起した独立運動——イースター・ライズィング（Easter Rising）についてのお話があった。1916年といえば，1932年からは，たった16年前の出来事である。毎日聞かされている「アイルランドのお話」で，私たちは皆「ああ，またいつもの……」的に聞き流していたが，時間がたつにつれてこの「イースターの蜂起」が心の奥深くでふくれあがっていった。

植民地という苛酷な悲運の中で，イギリス軍が多数駐屯しているそのような時，軍人でもない人たちが独立を目ざして立ち上がったというのである。そのリーダーの名はパトリック・ピアス（Patrick Henry Pearse, 1879～1916）。校長，劇作家，詩人……一緒に立ち上がった人たちの中に文人が多く，俳優もいた。兵舎がないから，オー・コーネル街にある中央郵便局に立てこもり，独立宣言文を掲げたというのである。軍人でもない人たちが何故？私の心の中でこれが音もなくさらに拡大していった。祖国愛なのか，民族愛なのか，蜂起したらイギリス軍に捕えられ，処刑されるであろうことは百も承知のはずである。暴力を好む人たちではなさそうであるし，個人の利益などではできるものではない。また，社会主義革命とは種類を異にしている。

彼らが命をかけて愛した国とは，どんな国なのであろう。毎日聞かされる話がしだいしだいにつながって私の心の中には，自分の想像の中でエメラルドの島——アイルランドの様相が徐々に形を整えていった。当時知るかぎりのアイルランドの方々は，美しい英語で話されていた。ことにダブリンから

来られた方々は，格調高い，やや古風な楽しい響きをもっていたと今でもよく記憶している。

ところが，このイースター・ライズィングのピアスが好んで使用していたのは英語ではない，ゲール語とかいうケルト語といって，ヨーロッパで一番古い言語の一つであるという。ここではたと困った。ゲール語——Gaelic！図書館へ飛んでいったが，作品はおろか，辞書すらなかった。アイルランドの誇るべき言葉のものが一つもない。おぼろげながら，彼らはケルトの世界，この文化を守ることが，彼らの取り戻したいものの一つであったに違いない。これにはじめて気が付いた。とにかく英語ではない言語，このゲール語の中に彼らの情熱が生きてひそんでいるに間違いない。その夜も更けて，いろいろと考えながらいつまでも火鉢の赤い火を見つめ，灰を火箸で掻いてはならしていた。鉛筆をけずるとその小さい木片が赤い炭火の間に落ち，一度は真っ赤になって何ともいえない香りをほのかに漂わせて静かに燃えつきる。いつもなら，この香りで奇妙に考えがまとまるのであったが，この日は，何だかよくわからない全く不思議な事実が，胸の奥深いところにある若い「思い」に点火したのであった。さらに夜は静まりかえった大地の上に時を刻んでいく。寝なければいけない，明日があるのだから。蒲団の中へ入っても，寝る前にむさぼり読んだブラザー・レオ著の英文学史の後部にあるアイルランド文学史の一節，パトリック・ピアスに関する記事と彼の横顔の写真が浮んでは消えた。そしてそのまま夜が明けた。私は，全くアイルランドに取り付かれてしまっていた。

翌日放課後丸善に飛んでいったが，むろんのこと何の手がかりも得られぬままである。何とか現地へ行くほか道がない。しかしアイルランドは，その時，遠い遠い西の果てであった。

時が流れたが，心にともされた小さな炎は少しも弱まることなく人知れず燃え続けた。そのうち，日本は，連合国側の ABCD ラインとかいう経済封

パトリック・ピアス（1879〜1916）　1932年，著者が初めて出合った肖像。エーラ（アイルランド）の独立運動の先駆けとなった若き愛国詩人。神話・伝説を大切に伝承せる民族の誇りと，現況の悲運より独立を切望する心を詩う。1916年，イースター・ライズィングに参加し，敗れてイギリス軍に捕えられ，部下に代って極刑に処せられた。
(Brother Leo : *English Literature*, p. 632)

鎖の不穏な国際情勢の中に置かれ，自分の身の周りにもこのはっきりしない見えざる「締め木」が徐々に迫ってきて，いつか身動きできなくなっていた。

ついに第2次大戦の開戦となり，東京の空襲が始まると，一家は静岡県の殿村へ疎開することになった。当時は，東海道線の汽車といえば，窓からはい込んで乗ることが多いので荷物は持てない。それで，一番上等な服地にしっかりとくるんで，あの英文学史の本を1冊他の雑物にまぜて郵送した。現地へ着いてあけてみると，その布地は抜き取られてしまっていたが，ピアスの写真のあるその文学史の本は無事だった。床の間に置いた。当時，英語と英文学は「敵性言語」であり「敵性文学」である。日本は，アイルランドとは交戦状態にあったわけではなかったが，当時の日本では，アイルランドとイギリスは，見分けられなかったのが大勢を占めていた。でも私にとって，この本は床の間に置くべきものであった。

戦争も終り，やっとヨーロッパへも旅行ができるようになった。東京都立高校の英語科主任，英語教育研究の全国組織である「全英連」の副部長，東京都英語教育研究会の事業部長，そして文部省の大学入学資格検定委員をかけ持ちしていた頃，ヨーロッパへ視察に行く機会に恵まれ，はじめてアイル

ランドの地を訪れた。

ダブリンの日本大使館の書記官の方が，一流の書店であるホッジス・フィギス (Hodges Figgis) へ案内して下さり，はじめてピアスの本に接した。涙が出て文字が読めなかった。涙をそっと気づかれぬようにして本を買ったが，ゲール語を私はよく読めなかった。それ以前に入手した資料による断片的なゲール語の知識ではほとんど役に立たず，本格的にやり直すことの必要性を身にしみて感じた。帰国後幸いにも，すぐれたゲール語の指導者アイリーン・加藤先生にお目にかかった。12人で始めた研究会は，次の週に半数となりたちまち減って2人となり，ついに私1人になってしまった。もしかしたら断片的な知識では，まるで役に立たないと思っていたが，どこかで底力になっていたのかも知れないと気づいた。

アイリーン先生の御指導が始まったのは，1967年4月頃であった。その年の8月，アイルランドのリンチ(Lynch) 総理大臣が訪日され，私が歓迎の辞を述べることになった。これがゲール語を公式の場で口に出して述べる最初の機会であり，足がふるえ，靴の踵(かかと)が鳴る思いがした。自分のゲール語が相手のかたに理解していただけたその喜びは，もう夢中であった。本当にアイリーン先生の音声と文法を同時進行させるすぐれた御指導の賜であったのである。

1970年，日本で Expo '70 の大エキジビジョンが開かれ，そこにアイルランドのパビリオンがあった。ところがその中にゲール文学に関するものが何もない。普通の物産以上にほしい文学に関する展示がないのである。すぐアイリーン先生に報告し，先生の親友エガルティー夫人へお手紙を差し上げてこれを報告した。間もなく多くの貴重な文献が展示され，文学コーナーはできた。その年の12月5日，そのコーナーの「続き」のようにアイルランド文学研究会が発足した。そして，私の夢——心の奥深くに燃え続けてきた炎が姿を少しだけ現し出したのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

やがて，外務省にお勤めの加藤氏のフランス駐在が決まり，アイリーン先生も離日された。やむなくその年，ダブリンにあるダグラス・ハイドの創立で有名なゲーリック・リーグでの集中講義に参加した。午前9時からコーヒー・ブレイクをはさんで正午までの午前中の2時限，昼食後は1時からまたコーヒー・ブレイクをはさんで5時までの午後の2時限，さらに夕食後7時から9時半まで。これが終り質問などがあると終講が10時にはなり，宿舎に帰って宿題（これもかなりの量）を片付けると夜半を過ぎる。このスケジュールでの毎日の「特訓」は，日本でも語学教育の場合には非常に能率が良いと思った。音声言語の学習法として少人数で，時をうつさずたたみかけてゆく訓練が特に効果的である。日本でも大変参考になると思う。

ゲール文学というと，はじめの頃は「なぜそのような世間に通用しないものを研究するのか」とか「もっと他にテーマを見つけた方がよいのでは？～○○の研究などされてはどうですか」との恩師や先輩からのアドバイスをいただいたけれども，私の小さい炎には変化をもたらさなかった。そして心の片隅で燃え続けた。自分の利益とか自分の地位のためとか，名誉心で研究しているのではない。ただゲール語，ゲール文学の世界に魅せられたからである。母だけが私の心を見ぬいていて，そっと蔭から支えてくれていたのであった。

研究の途上，御支援いただいていたエガルティー夫人，御子息のキアン・オー・ヘガルティー氏，クレーリー夫人，マーチン・ボーサング氏，ネッサ・ドーラン女史，カイバード教授，トイラー氏，数えきれぬ方々の顔が浮ぶ。そしてパトリック・ピアスの面影は，もう50年以上も生き続けている——私の中で。

現在，ゲール語による輪読会を日本アイルランド文学会の研究部で，グリーン・グループ（上級），ホワイト・グループ（中級），オレンジ・グループ（初級）とに分れて行っている。これは，今まで温く御援助いただいた駐日大

使御夫妻はじめ書記官の皆様のお蔭であると深く感謝し，またゲール語の常任講師として絶えず御指導いただくカハル・オー・ガルホール師のお力添えの賜であると，いつもありがたく感激を覚えている。また，師の御父様のショーン・オー・ガルホール氏は一度来日され，メンバーは直接御指導を受け，いわゆる「プロのゲール語の指導者」とはこのようなものであるかと深い感銘を受けたものであった。御夫妻の帰国後もテープによる御指導が続いた。

現在，アイルランド文学2000年の歴史の主流をなすゲール文学を，輪読会という形で皆と一緒に研究したり，今度のように，「アイルランド文学史」を世に送ることができるのは，この上もない喜びであり，心の底から言葉に尽せない感動を覚える。

今回，この『アイルランド文学はどこからきたか——英雄・聖者・学僧の時代』<いずれ日を改めて，続編の中世・近現代の文学史を刊行の予定>の発刊にあたって，駐日アイルランド大使シオーン・ジー・ロノーン閣下より御懇篤な「序」を頂戴し，感激しております。カバーの写真についても，大使館の特別の御配慮をいただきました。合わせて厚く感謝申しあげます。またいろいろ御考慮いただいた誠文堂新光社社長小川茂男氏，および編集の三宅明氏の並々ならぬ御配意に深く御礼申し上げます。

1985年9月20日

三橋　敦子
（日本アイルランド文学会代表）

アイルランド文学はどこからきたか　目次

Focalon Ambasadoir 〈駐日アイルランド大使「序」〉――3
まえがき――6

第1章　序　論――15
1　ゲール文学の源流……15
2　黄金時代への展望……20
3　アングロ・アイリシュ文学の傾向……22
4　現代アイルランド文学の様相……26

第2章　大陸ケルト語の成立と崩壊過程――29
1　ハルシュタット鉄器文化の流れ……29
2　ラ・テーヌ文化……32
3　スキシアの西進……34
4　ケルト民族の発生……38
5　ケルト系種族の移動と文化圏拡充……40
6　ローマ軍の進攻……49
7　ウェルキンゲトリックスの英雄的活躍と悲運……53
8　ケルト語の崩壊過程……56

第3章　島嶼ケルト文化の発達――65
A　ブリテン島へのケルト人の渡来とローマ軍の進駐 …65
1　ケルト人のブリテン島上陸……65
2　ローマ軍の進攻……70
3　カレドニアとピクト族……74

B　アイルランド島有史前のすがた……78
1　ヨーロッパ大陸と地続きであったアイルランド……78
2　氷河期のあとに出現した森林に「榛(はしばみ)」……79
3　アイルランド島最初の住民……80
4　ケルト語ではない地名の残るアラン諸島……82
5　巨石文化の担い手たち……84
6　ハルシュタット系文化の継承者と
金製品輸出国の工芸家たち……90
7　ラ・テーヌ文化の担い手たち……92
8　アイルランド島へのケルト系諸部族の渡来と定住……94
1　ケサールの渡来……94
2　パーソランの渡来……95
3　ネミディアンス族の渡来……96
4　フォーモリアン族の渡来……96
5　フィルボルグ族の渡来……96
6　トゥアハ・デ・ダナーン族の渡来……99
7　マイリージァン族の渡来……100
9　Q-ケルト語とP-ケルト語の共存……104
10　古代ゲール語の方言はどこからくるか……105

第4章　アイルランド文学の黎明期――107
1　口承文学の世界――ゲール文学抬頭期……107
2　最古の詩人か，アマギン……110

第5章　アイルランドの古文学――――――――――――119

1　古代宗教――ドゥルイド教とキリスト教伝来……119
2　僧院と学問――聖パトリックと聖コロンバの活躍……124
3　二大聖人に続く学僧たちの文学的功績……135
4　アイルランド文学黄金時代の抬頭……137
　1　口承文学と文字文学の併存……138
　2　ケルト文字の発達と修道院……150
　3　民間伝承と歌謡……165
5　古代ゲール語の性格……170

参考文献……196
主要語索引……201

アイルランド文学の歩み（表）……24
アイルランドの州名（地図）……64

第1章

序　論

1　ゲール文学の源流

文学は人間の作品で，その歴史は，人間のたどった道筋に密着して展開する。どこの国の文学でも，どのような言葉の話し手たちがその地に，いつ訪れ，定住し，彼らの言語がどのような先住民の文化を通して混交し，それが濾過され，やがてどのような道筋を経て，その「土地の言語」として，それ独特な性格を帯びてゆくかということが，文学の発生や発展の過程で根本的な様相を形成してゆくのである。そして，その土地の文学は，あたかもさまざまな地域から流れ出る小川の水を受け入れながら，周りの土地を，豊かに養いつつ悠然と流れる大河にも似ている。

古代ケルト人は，ヨーロッパ大陸においては，ハルシュタット，ラ・テーヌの鉄器文化を吸収して，大陸の広範にわたる地域でケルト文化圏を形成したが，やがて彼らの言語は，他民族の言語と混然と交ざり合い，中世になる頃までにその姿をしだいに判別できぬものにしていった。ところが，本流から逆に別の方向に流れ出した小さい流れが，ブリテン島，そしてアイルラン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com